

鏡をまつる

皇學館大學々長

谷 省 吾

今日は明治天皇の聖徳を記念する学会において講演をさせていただきますことに光榮至極でございます。これから一時間よろしくお願ひしたいと思います。

一

昭和天皇崩御になりました、今上天皇が天皇の位におつきになりました。そして、神器を御繼承あそばされました。その神器と申しますのは、御承知のとほり鏡と玉と剣、この三つのもので、そのうちの御鏡は皇大神宮の御靈代みたましろとして祭られてあるところのものであります。この皇大神宮の御靈代みたましろの御鏡につきましては、『古事記』・『日本書紀』にその御由緒につきまして神話としての伝承があります。それによりますと、『古事記』をとつて考へてみますと、天孫降臨のときに天照大御神から仰せがありました。その仰せは「これの鏡は、専らもは我が御魂みたまとして、吾が前まへを拜いっがこ如ごといつき奉まうれ」といふ仰せでありました。

「これの御鏡」といふのは、実は神話をもう少しさかのぼりますと、天照大御神が岩屋の中にお隠れになつたこと

がありますが、そのときにもう一度大御神にお出ましましたために神々が相談されました、岩屋の前で祭りをされます。そのときに衾に鏡と玉をつけてお祭りをされるわけです。これは実は祭りといふもの、実際の形式を反映したものと考へてよいと思ひます。そのときに、特に鏡につきましては、『古事記』によりますと、天兒屋命（アメノコヤネノミコト）と布刀玉命（フトタマノミコト）が、大御神がちよつと岩戸をあけて御覧になつたときに、その鏡を大御神の前に差し出されたといふ伝承もあります。

神様の御霊が鏡にお掛かりになるといふことを示した古典の例は決して少なくありません。たとへば『延喜式』に伝はつてをりますところの「出雲国造神賀詞」を見ますと、大穴持命（オホアナモチノミコト）がおつしやるには、「已れ命の和魂を八咫鏡に取り託けて、倭の大物主櫛庭玉命（オホモノヌシクシミカタマノミコト）と御名を称へて、大御和の神奈備に坐せ」。これは大神神社の御鎮座の由来がそこにあるわけですが、さういふ仰せがあつた。これなどは非常にはつきりした例です。

それから、『日本書紀』の神代の巻に、伊弉諾尊（イザナギノミコト）が左の手に白銅鏡をお取りになつたときに、大日靈尊（オホヒルメノミコト）すなはち天照大御神がお生まれになつた。右の手に白銅鏡をお取りになつたときに、月弓尊（ツクユミノミコト）が出現されたといふ伝へがあります。

また、『万葉集』を見ますと、巻の五に「男子名は古日に戀ふる歌」といふ歌（国歌大観番号九〇四）がありまして、その一節に、

しろたへの たすきを掛け まそ鏡 手に取りもちて 天つ神 仰ぎ乞ひ祈み 地つ神 伏して額つき

と述べてをります。しろたへのたすきを掛け、鏡を手にしてといふのは、明らかにこれは神霊を招きまつる所作です。八咫鏡を始めとして、鏡が神の御霊代として奉斎されてゐる例はたくさんありまして、いちいち挙げるのもきりがありません。古代から現在に至るまでさうです。また、平安から鎌倉にかけて、御神体を意味する御正体といふ

言葉が普及いたしましたとき、それらは多くの場合、掛けて礼拝する神鏡を指したのであります。そして、その御鏡に、神様や神様の本地であるところの仏様の姿、また御神号、仏様の名前、あるいはその仏様を一字で象徴するところの梵字を刻んだものも行はれるやうになりました。

のちに江戸時代になりますと、谷川士清ことすがといふ学者が、カミ（神）とはカガミル（赫見）であつてカガミ（鏡）に通じるといふことを言つてをられます。これは現在の国語学では承認することは難しいのでありますが、しかし、そのやうな説が現れてきたことには一つの歴史的な意味が存すると思ふのであります。

鏡といふものは日本人自身が作り出したのでありません。外来のものであります。漢土の古代において鏡が作られて、それが日本に渡つてきたわけです。それは貴重な宝物でありました。日本では古墳時代には鏡と玉と剣が代表的な宝物でありまして、古墳の副葬品を代表するものになつてをります。

彼の地におきましては、鏡は宝物であつて、その鏡には何か靈的な力が伴ふものと信じられてゐたのであります。これは古代におきましては、宝物といふものも、さういふ働いさきを持つから宝物と考へられるのかもしれませんが。彼の地におきましては、鏡の銘を見ますと、これを服する者は命いのちは長く、また富貴であらうといふことを銘として刻んでゐるのが多うございます。

さういふものが日本に渡来いたしました。しかしながら、その鏡をもつて神様をお祭りするといふのは、これは日本人のしたことです。われわれの祖先はこの鏡を神様の御霊代として奉斎したのであります。日本人が神様をお祭りするときには、そこに神様の御霊みたまの依よりたまふところのものが設けられます。既に存在するか、あるいは、新たにそこに設置されるか、それが昔からのやり方です。それは山である場合もあり、石である場合もあり、水の湧き出る井である場合もある。あるいは剣であり、榊の枝であり、いろいろありますが、鏡が渡つてきたといふことは、その御霊代の材料たるべきものの一つの有力なものを加へることになつた。そしてまた、それが最も一般的なものとなつた

といふ次第です。

さういふ風になつたことにつきましては、やはり、それだけの理由があるだらうと考へられます。鏡がそれにふさはしい、著しい特性を持つてゐたからであらうと考へられるわけです。それについてしばらくこれを考へますに、鏡といふものは、先づ物を映すものである。鏡はそれに物を映し、人はこれを見るのでありますが、鏡はそこに何を映すか。人はそこに何を見るか。

二

先づ人がそこに見るものは、自分でありませう。自分がそこにある。これはたいへん不思議なことでありますが、鏡に映つてゐる自分らしきものが自分ではないと思ふ人はおそらくなかつただらうと思ひます。おとぎ話のなかに松山鏡といふのがあります。それは、鏡のなかに自分が映つてゐるのに、お母さんだと誤解したといふ話であります。普通は自分でないと思ふ人はなかつたにちがひない。自分そのものでなくても、自分の何かである。そして、それを自分だと意識するところに、人間の人間たるゆゑんがあるのでせう。自覚を導くところのものがそこにある。自分がかくのごとき者であるところ、そこで認識をすることは、そこから反省とか自覚といふものが起つてくるのだらうと考へられます。

そして、これが非常に重要な意味を持つてゐると思ひますが、鏡に映るものは決して自分だけではない。一切のものがそこに映るのであります。

自分を見るといふことで考へてみますと、昔から神道の教へのなかに、これは近世において言はれたことでありますが、朝鏡といふ教へがあります。この朝鏡の問題につきまして、二人の学者が言つてゐることは非常に対照的です。ので、それを御紹介してみます。

一人は六人部是香といふ国学者であります。その『日中神事記』を見ますと、鏡は毎朝見るものだ。人に依り託いて、人に災ひをなす妖魔のやうなものがあるが、それが鏡を見るとたいへん恐れて、逃げ出す。だから、昔から鏡を毎朝見ることになつてゐるのだと説明してあります。決して、鏡を見るのは自分を飾るために見るとだけ思つてはならない。さういふ意味があるのだといふことが述べられてゐるのであります。

もう一人は伴部安崇といふ、垂加神道の人であります。この人の『神道野中の清水』といふ本がありまして、そこに書いてあることは、人々は毎朝、鏡に向ふけれども、普通は、何か汚れがついてゐないかとか、傷がついてゐないかとか、さういふことだけを見る。しかし、それを見るのが本当ではない。心といふものは顔色に現れる。鏡に映つてゐる自分の顔を見れば、怠る心も、怒る心も、また平和な心も、みな顔に現れてゐる。それが朝鏡を見る一つの意味だ。それを見て反省して、平和な心に自分なるやうにする。そして、平和な顔がそこに現れるやうにするのが、朝鏡の役割だと説明されてゐるのであります。

これを比較しますと、後者の伴部安崇といふ人の説は極めて道徳的な感じが強い。前者の六人部是香といふ人の考へは呪術的な感じがいたします。どちらが古い考へを伝へてゐるか。ちよつと考へますと、前者の考への方が古いやうな気がします。『常陸国風土記』といふ古い風土記を見ますと、「魑魅」すなはち悪霊が鏡を見て退散するといふ伝承が載つてをります。それで、さういふ考へは古いといふことはわかりますが、一方の伴部安崇といふ人の考へ方も決して新しいものではなくて、鏡を人が見た極くはじめのときから、さういふ見方が出てくる可能性は必ず存在したと思ふのであります。どちらが古いかといふことは、なかなか難しいことだと思ひます。

自分の姿が鏡に映るといふのは、われわれは物理を学んでをりますから、不思議には思ひませんけれども、考へてみれば実に不思議なことであります。こちらが笑へば向かうも笑ふ。こちらが手を挙げれば、向かうも同じやうに手を挙げる。しかも、それは自分だけではなくて、ほかのものも全部そこに映るわけです。一切がそこに映し出される。

その上、大事なことは、映し出されるについてごまかしが存在しないことであります。うそがないといふことです。これが重要な意味を持つてゐると思ひます。

いま朝鏡のことを申しましたが、孝明天皇の妹様で徳川将軍にお輿入れをされた和宮様が「朝鏡」といふ題で詠んでられる歌があります。

愚かなる心のかげもうつるやと恥ちつつ向ふ朝鏡かな

鏡はごまかしを許さない。これで皆さんが連想されることがあるかと思ひます。「グリム童話」のなかの「白雪姫」といふ話であります。白雪姫をいぢめるのは継母である王妃であります。その王妃が鏡を持つてゐて、毎朝、その鏡に問い掛けます。「鏡よ、国中でだれがいちばん美しいか」と聞くわけです。さうすると、鏡が「お后さま、あなたが国中でいちばん美しうございます。」と答へます。王妃はそれが満足で、毎朝それを聞いて、鏡にしゃべらせてゐた。ところが、白雪姫がだんだん大きくなつた或る日、言ふことが違つた。「お后さまはたいへん美しい。しかし、白雪姫はあなたの千倍も美しい」と言つたのです。そこからや、こしいことがさらに展開するわけであります。こゝには、鏡が決してうそを言はないといふ觀念が伝承されてゐるわけです。

明恵上人といふ方のお弟子に喜海といふ人があります。その喜海といふ人が明恵上人の遺訓を集められた本があります。「梅尾明恵上人遺訓」といふ題がつけられてゐますが、それを見ますと、「人は常に浄玻璃の鏡に、日夜の振舞ひのうつる事を思ふべし」云々とあります。閻魔の庁に行きますと、浄玻璃といふ清らかな鏡があります。閻魔の庁で裁かれるときに、一人一人前へ出るわけですが、その鏡に、その人の生きてゐる間にやつたことが全部映し出されるといふのです。「人は常に浄玻璃の鏡に、日夜の振舞ひのうつるを思ふべし」と明恵上人も教へてをられるのであります。

鏡は一切を映すものである。これによつて、鏡が歴史であるといふ考へもあるわけです。日本の平安時代にいろいろ

ろできた歴史の書物が、何鏡、何鏡と、たくさんありますが、その一つが『大鏡』です。その初めのところに歌があります。

明らけきかゞみにあへばすぎにしもいまゆくすゑのことも見えけり

とあります。過ぎ去つたことも行く末のことも、みな、その鏡に明らかに映し出されてゐるといふのであります。歴史を敬虔、謙虚に学ぶならば、過去のことと同時期に、また将来をもそこで見通すことができる言つてゐるのであります。

それから、道元禪師の『正法眼蔵』のなかに「古鏡」といふ巻があります。これはたいへん難しいものですが、古鏡といふものに対する道元の考へ方によれば、いにしへが来ればいにしへがそこに現れる、現在が来れば現在がそこに現れる、仏が来れば仏がそこに現れるといふのであります。

鏡といふものは、さういふ風にすべてを映し、すべてを現す。また、すべてを見通すものであるといふ考へ方が、広く伝承されてきてゐるのであります。「映す」といふことがすでに不思議なことではありますが、しかも、ごまかしがない。うそがない。

三

そこで、鏡が神の御霊代としてまつられることを考へる場合に、もう一つ踏み込んで、鏡の性格を考へてみたいのであります。鏡の特性とは何であるか。鏡の特性を感じるときに、それによつていろいろ連想がある。また、それが神様への導きの働きをすと思ひます。そして、そこに神様のお徳をより深く思ふのだと思ひますが、その特性とはいつたいどういふものか。

先づ「明」、「明らか」といふことであると思ひます。『日本書紀』の仲哀天皇の巻を読んでみますと、仲哀天皇が

筑紫の方に行幸をされる記事があります。その行幸を筑紫の豪族五十迹手（イトテ）といふ者がお迎へをするわけですが、そのとき櫛を船の船先と尻に立てて、その間に玉と鏡と剣とを掛けてお迎へをした。そして、五十迹手が天皇に奏上して申しますには、玉のやうに「曲妙」に天下をしろしめし、鏡のやうに「分明」に山河をみそなはし、この剣をもつて天下を平定なさいますやうにといふ意味のことを申し上げたのであります。そこでは、鏡は明らかである、分明であるといふことが象徴的意味をこめて語られてゐるのであります。

この鏡と玉、剣といふ三種の神器にもなりました代表的な宝器につままして、象徴的な、或いは道德的な解釈を試みた例は、この例以外にはありません。それがずつと時代が下りまして、やうやく鎌倉時代になりますと、伊勢の神道学のなかで、この仲哀天皇に関する伝承が改めて見直され、確認され、そして、鏡を神と祭る問題を考へる一つの資料にもなつてをります。鏡をもつて神様をお祭りしてゐる伊勢の神宮のなかで、神道学がだんだん発達してきたときに、鏡の問題がいろいろ考へられることになりましたが、その伊勢の神道学を学びながら、より広い視野をもつてこの鏡の問題を解明されたのが、北畠親房公であります。

北畠親房公の『神皇正統記』を読んでみますと、親房公の神道に対する考へが明確にそこに語られてをります。そして、そのなかで、神道において鏡を神とまつるきもちを、実に心憎いほど明晰に、しかも深く説いてをられるのであります。特に天照大御神を御鏡をもつてお祭りしてゐる、そのことを掘り下げて、天照大御神のお姿をその御鏡が象徴してゐるとして、いろいろ議論を展開されるのであります。その一節を読んでみませう。

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして万象をてらすに是非善悪のすがたあらはれずといふことなし。其のすがたにしたがひて感応するを徳とす。これ正直の本源なり。

そのあと、玉とか剣のことも出てきますが、鏡については、さういふ風に述べられてゐます。さらに、

中にも鏡を本とし、宗廟の正体とあふがれたまふ。鏡は明をかたちとせり。心性あきらかなれば、慈悲決断は

その中にあり。又正しく御影をうつしたまひしかば、ふかき御心をとめたまひけんかし。とも論じられてをります。

そこで、鏡は明である、鏡は明らかであるといふことと、もう一つ、鏡の特性として考へなければならぬのは、「浄」、「きよらか」といふことであります。『神皇正統記』にも「鏡は明をかたちとせり」とあります。まさにさうでありまして、『日本書紀』によりますと、天照大御神のお姿は「光華明彩、照徹於六合之内」（ひかりうるはしくして、くにのうちにてりとほる）といふ風にたゞ、へられてをります。一切に光を与へたまふ神と申しませうか、さういふ天照大御神こそは、まさに鏡をもつて祭るのに最もふさはしい神であるとするのができませう。

ところが、鏡は暗いところにあつて自分で光を発するといふ性質のものではありません。反射して光を発するのであります。映すものであります。しかしながら、神様がそこに依りたまふことによつて、親房公の言葉によりますと、「正しく御影をうつしたま」ふことによつて、御神体たる御鏡が、その「明」を内からの輝きとしてきたと考へてよいのではないかと思ひます。

冒頭にお話しました「古事記」に伝へられてゐる天照大御神の御言葉、「これの鏡は、専ら我が御魂として、吾が前を拜くが如いつき奉れ」、自分の魂としてこれを祭るやうにと仰せられてゐるわけです。而うして、その鏡の明なる性格が最もよく發揮されるのが、その鏡の最も浄なる状態、清らかなる状態においてであるといふことであります。これがまた非常に象徴的な意味を持つてゐると考へます。

鏡には、いろいろな素材があります。銅なら銅といふ素材のなかから研ぎだしてくるわけです。しかし、この浄なるものは、鏡の本性と考へてよいかもしれません。ほかから獲得されたものではない。油断しますと、錆びたり曇つたりしますが、磨くことに怠りさへなければ、常に浄なる本性は変りなく保持されるのであります。そして、その浄なる本性が最も見事に現れたときに、鏡の明なる性もまた最も見事に發揮されるのであります。

ここまでお話をしてまゐりますと、どうしても考へなければならぬのは「祓」の問題です。神道の祭りにおきまして不可欠のものとして行はれる大事な行事、最も一般的な行事これが祓であります。神様の御前に立つときには清でなければならぬ。神様をお祭りするときには、すべてのものが清らかなる状態でないならぬ。これが基本的な要請であります。祓によつて清らかなる状態がもたらされる。そして、初めてお祭りをとり行ふことができ、また、われわれが神の御かげを頂戴することもできるわけです。

神様からいたゞいた生命は、本来は汚れないもの、本来、清なるものである。しかし実際は、この複雑な世の中に生きてをりますと、いろいろ罪や汚れがついてくる。それは意識するとしなにか、はらず、さういふものがたくさんついてきますので、それを祓ひ落とすことが必要です。特に神の御前に立つときには、それはすべて祓ひ落とさなければならぬ。そして、この祓は、すべて繰り返して祓ふ、その都度祓ふことが大事なことであります。鏡が繰り返し研ぎ磨かれることによつて本性をよみがへらせるやうに、繰り返し繰り返し祓が行はなければならぬ。また、祭りのたびごとに祓が行はれるのであります。そして、われわれの本性の曇りなきものに立ちかへるといふ心構へで、神様の御前に進ませたいたくわけであります。

四

この「浄」と「明」といふ二つのものが表裏一体のものであるといふのが、神道の基本的な考へ方であると思ひます。明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまほしきは心なりけり

といふ有名な御製があります。まさに神道的な浄・明の境地を、見事に歌に表してくださいださつてゐると思ふのです。

この本性の清らかなる状態に立ち返ることは、たとへばさういふときの境地を表す言葉として、昔から「清々し

い」といふ言葉があります。清々しいといふのはどういふ境地かといふことを考へてみますと、「さしのぼる朝日のごとく」といふお言葉のやうに、単に清らかな状態になつたといふことではなくて、そこに一つの生命いのちのよみがへりといひませうか、活力の回復といひませうか、或いは、生き生きとした生命感ともいふべきものが、祓によつてもたらされるところの心身の状態に存在してゐると考へてよいのではないかと思ひます。

祓によつてわれわれの浄なる本性を取り戻させていただく。それは浄であつて、また明である。神様の御光みひかり、みかげがまた浄にして明なるものですが、さういふみかげを頂戴して、新しい力で生きていく。たとへば毎朝、私どもは神様にお参りをする。御先祖様にお参りをする。その前に、起きまして、手を洗ひ、口をすすぐ。これは神の御前に進むための行事ではないのだらうかと思ふわけです。そして、御前に進んで神様を拜む。その繰り返しが毎日であります。毎日毎日そのことを繰り返して、毎朝さういふ状態にならせていただいて、一日一日をまた元氣よく頑張つてゆく。さういふことの繰り返しかへし、積み重ねによつて生き甲斐のある人生ができあがつてゆくのだらうと考へます。

このやうに考へて参りますと、かういふ神道の論理を象徴するものが鏡ではないかといふ感じさへいたします。そして、それがまた鏡をもつて神様を考へ、そして、神様をお祭りするといふことになつてきたゆゑんではないかと考へるのであります。

後水尾天皇のお書きになりました「当時年中行事」といふ書物を拝見いたしますと、天皇は毎朝、清涼殿じやうりやうの石灰いしばいの壇といふところで神宮をはじめ、神々を遥拝されます。朝起きられますと、御湯殿みゆといふところにおはひりになつて御湯みゆをおかかりになつて潔斎けつさいをされます。そして、石灰の壇にお進みになつて、神宮をはじめ神々を拜されるのであります。それは、少くとも記録では、平安の非常に早いころからずつと行はれてゐることは明らかでありまして、それがずつと伝はりまして、明治に及びました。

明治になりましてから、東京にお遷りになりましたために、陛下の生活の御様式が変りました。そこで、現在では毎朝御代拝といふことで、その御精神を伝えていらつしやる。侍従の方が陛下に代つて、宮中三殿に参拝されますが、その間、陛下は御座所でおつししみであり、その御報告をお受けになつて、はじめてお仕事を始めになるとうけたまはつてをります。

さらに、『当時年中行事』を拝見しますと、毎朝の御拝をお済ませになつた天皇は、常の御殿にお帰りになる。古くは清涼殿そのものが常の御座所であつたのですが、時代が下つてきますと、常の御殿は別のところに設けられるやうになつてきました。その常の御殿にお帰りになりまして、鏡の御拝といふのをなさると書いてあります。鏡の御拝をなさつて、そのあと朝の御膳におつきになるといふことです。

この鏡の御拝の御様子につきましては、『当時年中行事』のなかには何の御説明もないのでありますが、別の記録、『伯家部類』によりまして、そのことが詳しく書いてあります。伯家とは、神祇官の長官に任ぜられました白川家のことであります。『伯家部類』によりまして、御鏡は南向きに置いてありまして、それに対せられました天皇は二拝されまして、三種の大祓といふものを三度お唱へになつて、御拍手二つあつて終られると書いてあります。

この鏡の御拝がいつごろから行はれるやうになつたかは、全くわかりません。神宮も賢所も皇祖の御霊代として御鏡をお祭りになり、陛下はその祭りを厳格に伝承してこられました。そして、さらにまた、毎朝鏡を直に拝せられて、御自身のお姿を見つめられるのでありまして、その御習慣の中には、非常に深い精神的な意味がこめられてゐたことと拝察申し上げます。

宮中では、二月と八月の彼岸のときに、御鏡研ぎといふ行事がありました。鏡師が御鏡を研ぎ磨くことを奉仕することが行事になつてをりました。これは『御湯殿上の日記』やその他の記録に見えてをりますが、これが鏡の御拝と関係があるものなのかどうか。少なくとも天皇のお使ひになる御鏡を研ぐことが恒例の儀式化してゐたことにも、

一つの意味が考へられて然るべきではないかと思ふ次第です。

五

さて、伊勢神道も、北畠親房公も、その鏡についていろいろ考へ、天照大御神の御神徳について考へを及ぼしたときに、強調されたことの一つは、「正直しやうぢき」といふことです。天照大御神は正直そのもののお方だといふことは、親房公の力説される所でありまゝです。そして、そのお徳を象徴する御鏡は「正直の本源」とも申すべきものであるとも言つてをられます。「天照大神もただ正直をのみぞ御心としたまへる」。そして、その大御神を仰いで生きるには、心に一物をたくはへず、別の言ひ方をすれば、「境々まがひに対すること、鏡の物を照らすが如く、明々として迷はざらん」ことを期すべきであると、論じてをられます。

かういふ親房公の、鏡に対するいろいろな議論について、儒教や仏教の考へ方をそこにはめたものであつて、鏡に道徳的な、あるいは、象徴的な意味を求めることは不可である、と論じた学者がかつてはいろいろをられました。しかし、私はそれに反対であります。決して、さういふべきものではない。むしろ、神道の本質について深い沈潜、それに通じる鏡の性格についての敬虔な思索が、親房公のこの議論を導き出してゐると思ふのであります。

正直といふものは、私は前から「祓の倫理化」といふ言葉で説明してをります。神の御前に立つときには清らかでなければならぬといふ祓の精神が、日常生活の教へとして概念化されたときに、それは正直といふ徳目となつて説かれるやうになつたのだといふことであります。明と淨、それを一体として象徴してゐるところの鏡をもつて神様をお祭りしたわれわれの祖先、それが正直を道徳の徳目として伝承したことは、当然のことだと考へます。

鏡を祭る心、鏡をもつて神を祭る祖先以来の心を深く把握することは、私は非常に必要なことだと思ひます。強く意識すると否にかかはらず、鏡をまつることのなかに内在してゐる心にかつとはひり込んで、それをつかみとる

ことは、われわれ自身の心の理解にも通じるものであつて、そのことは神道学の大事な課題でなければならないと考へるのであります。

六

最後に少し付け加へて申し上げます。『法華經』に「法師功德品」といふ巻があります。法師といふのは『法華經』を受持し、読み、誦し、解説し、書写するところの菩薩であります。その法師について、仏が讚へながら説明してゐるくだりがあります。それを見ますと、「若し法華經を持たば、その身甚だ清浄なること、彼の淨瑠璃の如くにして、衆生みな見んことを意はん。又、淨明なる鏡の悉く諸々の色像を見るが如く、菩薩は淨身に於いて皆世の有らゆるものを見ん」と述べてをります。ここに言はれてゐることは、先ほど來述べてきた神道の論理、鏡の論理と共通してゐるものとしてよいと思はれます。

私は先年、天照大御神のことを『日本書紀』が「光華明彩、照徹於六合之内（ひかりうるはしくして、くにのうちにてりとほる）」と述べてゐることにつきまして、これは『金光明經』の影響が非常に強いのではないかと論じたことがあります。しかし、『金光明經』は鏡といふことを述べてゐるではありません。『法華經』を『日本書紀』の記事の典故とは言へませんが、『法華經』のこのくだりには、非常に考へさせられます。

『法華經』は、聖徳太子の注せられた三經の一つであります。私は、この三經の注釈が非常に大きな意味を持つてゐると思ひます。日本の仏教の展開に根本的な意味を持つてゐる。三經のもう一つは『勝鬘經』であります。

『勝鬘經』といふお経は、実は自性清浄といふことを力説するお経であります。ひとりひとりの持つてゐる自己の本性は、平生は煩惱といふものによつて覆はれてゐる。だから、われわれはそれをなかなか見ることができないけれども、煩惱を取り除くことができれば、清浄なる本性が現出する。そして、清浄なる本性は、如来蔵とも言ひますが、

如来になる、仏になる可能性を抱いてゐる、蔵してゐるといふのでありまして、それが、大乘仏教の基本的な立場なのであります。

聖徳太子の『勝鬘經義疏』を拝見しますと、太子のお言葉のなかに、「此の如来蔵は、自性清浄にして、惑中に在りと雖も、生死の為に染せられず。但隱覆せる而已」と説明していらつしやいます。

空海も最澄も、根本にはその考へを持つてをりました。日本に定着しはじめた仏教が、平安時代になつて、神道の祓を積極的に導入してゆきます。行事に祓を取り入れるわけですが、その祓がいかなる意味のものであるかといふことを教学的に説明する必要があります。その祓の解釈を含んだ仏教的な神道、たとへば兩部神道がさうでありましたが、さういふものが現れてきました。そして、その祓の解釈におきまして、自性清浄の考へに基づいた議論が展開されてゐるのはむしろ当然であります。そこで、当然、正直といふ道徳的な徳目がまた強調されてくるのであります。

鎌倉時代に發達した伊勢の神道学は、兩部神道などの影響を非常に強く受けてをります。伊勢神道においても、正直といふことが一つの中心のテーマでありました。神道はさういふ仏教の觸発を受けて、神道自身の内なるものを自覚する学問を構築しはじめたともいへるのではないかと思ひます。

神道が仏教に觸発されて、その思想を深めてゆくといふことと、仏教が神道を理解しながら神道を取り入れて人々の心のなかに深く入つていくといふことは、どちらからどちらへといふ問題ではなくて、宗教的な心情といふものが深く自らを掘り下げたときに、おのづから一致するものがあつたといふことではないかと思ひます。そのやうな思想の發展の経過を、單なる歴史の流れの立場からだけではなくて、宗教哲学といひませうか、さういふ根本のところまで立ち入つて掘り下げてみるのが、神道学において非常に必要だと考へてをります。

北畠親房公の著作に『真言内証義』といふ本があります。これは現在伝はつてゐる『神皇正統記』（いはゆる修治本）

が書かれた二年ほど後に書かれたものです。それは、真言密教の説くところの核心を、簡潔に説き示したものであります。法号を覚空と称してをられました親房公の、この方面の優れた学識、その理解の明晰さを、見事に示してゐるものと思ひます。その中にかういふことが書いてあります。「此の心、本来清浄なり。皎然明白にして満月の如し。無明の雲霧に覆蔽せられ、明らかに相を現せず。若し実のごとく覚知すれば、覆ふ物も無く、覆はるる物もなし。是れを浄性と云ふ」とあります。

親房公の思索が、かういふ面でも存在することを、『神皇正統記』の神道論を理解する一つの大事な助けとしてゆくことは、公の心のなかに深く入つてゆくことであつて、また非常に大切なことだと考へます。これは決して、公の思想が仏教思想だとか何とかだとかいふ問題ではないと考へるのであります。

大昔にわれわれの祖先が鏡をもつて神様をお祭りしたときに、このやうな神学的な解釈は存在しなかつたといふ方があるかもしれません。しかし、祖先が鏡をもつて神を祭つたその心象の奥に、古人の思索に導かれながらわれわれが参入してゆくことは可能であり、かつそれが、神道学の明らかにすべき大事な課題であると信ずるものであります。そして私の今日のお話が、さうした方向を示すための一つの手掛かりとなりえたとすれば、まことに幸ひに思ふ次第でございます。